

審査の結果の要旨

氏名 張 燕

大学生の海外留学には様々な種類があるが、本研究の対象は、大学間の協定により単位認定を目的として在学中に行われる国境を越えた学生移動（プログラム留学）である。自大学に在籍しながら留学先で幅広い学習や体験ができるだけでなく、留学先で取得した単位は在籍中の大学の単位に換算され、4年間で卒業が可能であり、プログラム留学の可能性と期待は大きい。しかしながら、東アジアでのプログラム留学は、公式統計等の対象外となっており、その実態さえも十分に解明されていなかった。序章、1章では、学生の国際移動の実態とその規定要因、大学の国際化等の先行研究を丹念にレビューしたうえで、本研究の研究課題を提示した。具体的には、東アジアの大学のプログラム留学の実態の解明、さらにその実態に対する、制度・政策と個別機関の戦略の影響を明らかにすることである。

2章では、日中韓3か国の学生の学位取得も含む国際移動の実態、各国での大学の国際化政策、留学生政策、単位互換制度などの検討を行った。各国でデータの収集基準が異なり、政府統計をもとに学士課程レベルのプログラム留学の実態を比較することは困難であること、いずれの国でも大学の国際化政策に力を入れていたが、日本での学生送り出し促進策は例外的で、中韓ではプログラム留学を直接に促すような政策はないことが示される。3章では、プログラム留学を促進するための域内交流の実態とその制度的な枠組みを検討した。2000年以降の交流実態の変化について、3か国の様々なデータを駆使して検討し、学生移動は、日本では東アジア域内・域外を問わず活発でないこと、中国では東アジア域内・域外において活発であること、韓国では東アジア域内の中国と活発であるなどを明らかにした。域内交流のための制度的な枠組みとしてUMAPやキャンパス・アジアがあるが、UMAPは交流の多い中韓では十分に活用されず、むしろ交流実績の少ない日本の参加校が多いこと、キャンパス・アジアは研究大学の先端的な学問分野に重点を置かれる傾向があること、いずれの枠組みも教授言語が英語に集中する課題などを指摘した。

東アジアのプログラム留学の実態を、韓国大学情報公開サイトから独自に作成したデータベースを用いて、韓国を主軸として解明したのが4章、5章である。4章では東アジア域外も含む全移動を対象に検討した。英語圏志向が強く域内交流が少ないこと、地域別にみれば地方大学で東アジアの域内留学の実績が多いこと、Davies(1992)の大学の国際化戦略モデルを参照し、1校当たりの学生移動数と実績大学数に着目すると、いずれも多いパターンは少なく、プログラム留学の発展の初期段階であることなどを明らかにした。5章では東アジア域内の移動に着目し、Neave(1992)の国際化のリーダーシップ駆動とベースユニット駆動の概念を用いて、相手校の集中度を3パターン（集中・分散・混合）の観点から検討した。分散型はほとんどなく、いずれの国でも混合型が多いことを指摘した。混合型の中から、6章では、域内留学が盛んな韓国の首都圏、大規模校のうち、エリート・ミッション・一般大学の3校の事例研究を行った。いずれの大学も域内交流の制度枠組みを活用していないが、各大学が持つ資源や役割の違いにより活用しない理由が異なるなど、それぞれのプログラム戦略、それを実現するための組織戦略が異なることを具体的に明らかにした。

本研究の意義は、東アジアの大学のプログラム留学の実態を明らかにし、その促進・阻害要因を制度・政策と大学の戦略の両面から検討した点にある。よって、本論文は博士（教育学）の学位を授与するにふさわしい水準にあるものと判断された。